

認知症患者のできること認めて

帯広 農村医学会が公開講座



第68回日本農村医学会学術総会の市民公開講座「認知症、支え合う暮らし」が、帯広市のとかちプラザで開かれ、市民や医療関係者ら約100人が参加した。

18日の開催。認知症当事者の竹内裕さん(広島市)とNPO法人認知症フレンドシップクラブ帯広事務局の荒浩美代表がトークセット

シヨンを行ったほか、認知症患者医療センターを持つ大江病院の大江徹理事長が講演した。

約10年前に59歳で認知症と診断された竹内さんは、忘れやすいという自身の症状を前提に、周囲に気づいてもらえるよう持ち物を派手にしたり、中身がすぐ確認できる透明なケースを持

認知症をテーマに意見を交わした市民公開講座

ったりするなど日常の工夫を紹介。当事者との接し方について「できないことを取り上げず、やらせてあげてほしい。居場所をつくり、認めてもらえると病気の進行もゆるやかになる」と話した。

大江理事長は認知症の種類や治療法などについて紹介した上で、薬物治療以外で周囲の人間ができる支援を説明。「(患者が)できないことや忘れたことばかり指摘せず、できることは何かを見てほしい」と伝えた。(正井 豊子)